

少女の身体から飛び散る、 内なる悲鳴

die prätze dance festival ダンスが見たい!7
オトギノマキコ 「脱臼するメルヘンは内側のテトリス」
7月18日・19日 麻布 die prätze



撮影/田中英世

「ダンスがみたい!」で、思いがけず見知らぬ素晴らしい踊り手と出会った

階段をそっと降りてきて、そのままコトツと骨が床にあたる音を立てて座り込む。少し湿ったコトツという硬い音が、音のない広い空間に響く心地よさと奇妙さにゾクとする。オトギノマキコのソロは、そんな忘れられないシーンから始まった。そしてそのまま、慣性で動かされるかのように、上体が静かに前に倒れ、頭が床

に触れ、お尻が突き出て、小刻みに揺れる足が壁をつたう。縮こまった小動物が壁際でもかいているかのような、得体のしれない動き。ゆっくりと身体が旋回しつつ、ふたつのでのひらが何かをいつくしむかのように斜めに差し出され、上体が起きあがるが、ふたつの足は内側へと捻れている。小さな花の刺繍のある白のブラウスに黒のスカート、少女といった姿の彼女の身体は、つねにどこかが捻れている。細く長い指は、昆虫の触角のように何かを探るのか、一本一本が勝手に動きまわり反り返る。足の指も上方に捻れ返りながら震え、気づくと眼もこの腕もいつのまにか別の表情でそこにある。いわゆる人形振りが、外からの力によって四肢が動いているかの如く装う意匠であるとしたら、彼女の動きはあくまでも内部からの力によって身体の各部を「脱臼」させて、そこにいくつもの小さな生き物を住まわせるかのようだ。くずおれながら無数のものがわきあがってくるその動きは、彼女が学んだというアルト一館の及川廣信から流れ込んだものなのだろうか。あるいは遠く、「私の体が破片になって飛び散り無数の側面をあらわし……」と叫ぶアルト一の声がそこに響いているのかもしれない。

オトギノマキコは物と戯れる。半分ほど水の入ったミキサー、そこにサクマのドロップを無造作に放り込む、バラバラと床にこぼれ落ちるものもおかまいなしに、硬いドロップでミキサーの歯が痛まないかという心配もおかまいなしにスイッチを入れると、鈍い音でドロップは砕かれてゆく。唸りを立てるミキサーを放っておいて彼女は再び踊り始める。ミキサーの持続的な攪拌音

◆J演劇とは何か?

現代日本の新しい演劇動向を批判的に総括する「J演劇」(Jはジャパン、ジャンク)という概念。その提唱者で、本紙の寄稿者としてもお馴染みの内野儀さんの公開レクチャーが行われる。舞台公演のビデオ映像を用いて「J演劇」の現在を語る。注目。

9月13日(火) 10:00 ~ 11:30 東京国際芸術見本市 東京国際フォーラム ホールD1

のなかで微細なリズムを聴き取るかのように、彼女の身体は繊細な触覚となって揺らめいてゆく。手の指と足の指がピクピクと反り返り、その動きが上体をねじ曲げて、両腕が床に垂直になるまでに広がる。その伸びきった緊張がクッと断ち切れるよう

にして両腕は背中へ折れ曲がる。内部のノイズをその末端へと誘導して、脱臼するまで耐えるかのような身体。ミキサーのノイズに混じって、聞こえない音が聞こえてくるような瞬間だ。

オトギノマキコはハッカネズミと暮らしているらしい。「風の谷のナウシカ」を歌いながら虫愛する姫君となってひとしきりその白くて小さな生き物と戯れる。舞台を照らす強い光に「感じのネズミ。床に四枚の色紙を敷いてネズミを載せ、食卓で用いるようなハエよけネットをかぶせてしまふ。そしてまたネズミをそのまま放っておいて彼女は踊り始める。ネズミはネットの隅でゴソゴソ動いている。彼女は壁際で壁に骨をぶつけながら蠢いている。そしてまた骨がコトツと床にあたる音。小動物のように折りたたまれてゆく彼女の動き。ネズミの動きが不可解なのは人間としての主体性を投影できないからなのだろうか、彼女の動きもまた投影という他者による搾取を寄せつけずに、不可解なポリフォニーを奏でる機械のように聞こえない音を立てている

素っ気なさというのだろうか、ミキサーもネズミも、少しばかり遊んだあとは「勝手にしていいね」とでも言うかのように放っておかれる。それでいながら彼女の動きに寄り添い彼女の動きを補完するようにそこに存在している。奇妙にも親密な交感の時を覗いてしまったようなさわめきを感じた。

ギャラリーやライブハウスで踊ることの多いという彼女にしてみれば、殺風景な劇場で踊ることは居心地の悪いものなのかもしれないが、アルト一と、それが細い糸であろうとも結ばれているオトギノマキコに、少々閉塞気味の劇場という空間を内側から脱臼させてもらいたい。

坂口勝彦

当世の地獄を潜る、恨憤の全体演劇。 汚泥と生木の森に肉体が炸裂し嘘と 恥辱の歌が響く。Alice Festival 2005

ゴキブリコンピナート
「碧のオリモノはレモンの匂い」
8月11日~14日 タイニイアリス

タイニイアリスの階段を降りるとチョロチョロと水音が聞こえる「おー水か! どんな空間なのだろう」と期待しながら劇場の中に入って、のけぞった。劇場全体を、樹木のジャングルジムのような構造が埋め尽くしている。密林。天井からは一糸の水が落ち続け、床は湿地帯のような全面のプール。観客は樹皮がついたまま曲がりくねる生木をくぐり、水の縁や一段高くなった空間の余白に居場所を確保して開演を待つ。

本物の木と流れる水の空間は神秘的でさもある。「伝説の楽園、シャンバラの密林か!」などと思ううち、開演。結婚式の装束のまま現れた新婚夫婦のデュエットによってここがなんと!「支笏洞爺国立公園」であ

ることが告げられ、舞台は一気に疾風怒濤の展開。台詞は、全編を通し止むことのない歌として綴られる。

新婚旅行にここを選んでしまったことを後悔する花嫁と花婿を森の民が襲い、開演数分にして花嫁花婿ともほとんど全裸に……。『樹木のジャングル』の3次元空間を入り乱れ、泥水を飛ばして池を走り回る俳優たち。やがて「お! 宿のおばさん」という歌とともに和服に提灯をかけた出陣の老婆が現れ彼らを救出し、主人公のカップル、魍魎魍魎の跋扈する森、襲い収奪する森の民、シェルターとしての宿とおばさんというこのステージの基本構造が提示される。

平成生まれの小学生のいじめにより花婿がゴキブリの用務員であることが暴露され、花嫁は裏切られ森の民に渡される。襲われる花嫁。森の民の内部抗争。



撮影/青木 司

森の民の息子の天才音楽少年。実は朝鮮人であった父親の、両班によって虐げられた過去。外人の音楽教師。森の商品経済の鍵となっているらしい赤いキノコと豚にされる族のリーダー。キノコの消費者であるクラブの客。奴隷になりながら森の民を支配するような花嫁。犯され腹を割かれ内臓を引きずり出され、裸にされ逆さにつられ生殖器から液体を噴出する花嫁。宿のおばさんとの汚物の放出合戦……。チェーンソーや斧を抱えた俳優がジャングルを飛び回る。掛け合い

やソロが入り組む、複雑な構成の単純な旋律の歌の応酬。痣だらけ泥水まみれの裸体。人工女性器をつけて逆さ吊りにされて歌う女優…圧倒されるうち、気がついたら水の中に倒れた花嫁が花婿の生首を抱えて横たわり、ステージは大団円を迎えていた。

この世でいちばんカッコ飛んだような舞台なのだが、めくるめく展開の物語は意外にも、律儀なまでに筋を踏み、ひとつひとつのエピソードは徹底的に関連付けられている。たとえば花嫁の包帯は、花婿が別れを告げようとしたデートでビルから落ちてきた鉄骨から彼をかばって出来た傷であること。それによって花婿は情にほだされ不承不承の結婚に。しかし彼はロリコンで…というように舞台上の全ての記号は舞台上の「事実」に執拗なまでに連鎖する。いじめ、金儲け、裏切り、フェティッシュで未成熟な新郎、悪辣非道な収奪、暴力、ドラッグ、セックス、父の愛、朝鮮人…ランダムなエピソードが一気にぐくられ、裂かれた腹から引きずり出される「臓物」のように繋がって展開されるのだ。作者はエピソードのどれかに執着しているのではなく、



その連鎖にこそこだわっているように思える。猥雑に、無慈悲に積層する現代の「はらわた」を引きずりながら一気に走り抜けていく舞台なのだ。象徴性や叙情性によって断章をコラージュするような構成ではなく、

マチネーの劇場を出たら、おもしろいゲイフェスティバル真只中の新宿2丁目だった。

前嶋知明

俳優の実体ではなく、じつは間(タイミング)を観ているだけ。類例は多いが、これは本当に演劇なのか?

M&Oプロデュース『アイスクリームマン』(作・演出:岩松了)
5月11日(水)~29日(日)

岩松了3本連続公演・第1弾として下北沢ザ・ズナリで上演された、岩松了作・演出による『アイスクリームマン』は、戯曲だけ読むといささか平板な印象を受けもする「言葉」が、舞台上でビジュアル化されることで生気を帯びてみえてくる会話劇であった。

これは私的な印象にとどまるのか判断がつかないが、今日、岩松了の芝居を「よめる」のはとても困難である、という点は、あらかじめ考えておくべきことのように思われる。逆に言えば、岩松芝居をうまく楽しむような見方(解釈枠組み)は、現在演劇シーンにおいて作動していないように思われてならない(そのこと『アイスクリームマン』という舞台成果の評価とは別に考えたい)。例えば、一時期喧伝されたように「静かな演劇」としてみようとするならば、確かに自動車免許合宿所ロビーという「場」の設定などはそれらしくもあるのだが、幕が明けた途端繰り返される声量と動きのうまさ目・耳につくのは間違いないし、逆に80年代風かといえば物語にしても人物配置にしても見事なまでに脱中心化されており、かといっていわゆる「商業演劇」や「新劇」のようなフォームへの依存は微塵もみられない。だから、客席からは笑いが起き、息を呑むシーンも多々あり、あるいは目当ての俳優が見られればそれでよいという雰囲気も少なから

ず漂っていたのだが、どのような角度からみるにせよ、今回の『アイスクリームマン』総体から安定した満足感を得ることはおそらく難しいに違いない。端的に、どうみたら楽しいのか分からず、解釈枠組みが舞台それ自体から提供されることもなく、雑多といってよいほどに場面ごとの演出コンセプトが異なる舞台を前にするうちに、ようやくこれは「喜劇」、しかもチューホフの登場人物のようなパーソナリティをもつ人々が織りなす「喜劇」なのだと思える。

『アイスクリームマン』に限らず、岩松戯曲の登場人物達は、極めて「人間」的である。あるいは、「人間」的でありすぎるといってもよく、しかも舞台表現において「演劇」的である。「いろんな人間がいるってこつたよ、世の中には……」という吉田の台詞が示唆するように、『アイスクリームマン』では20人を越えるキャストが舞台を所狭しと行き来しながら、各人がその台詞を通して自らの妄想的な「世界」を語り続け、そうした人々の行き交う場において「成立」しているかのような会話の数々は、その実、場の力学や他人との関係性とは無縁の拠点から発せられている。これは、情念や暴力が過剰なまでに噴出する際、そこに至る因果関係やプロセスが殆ど描かれないことと根を等しくする。しかも、こうして舞台上で不可解な

ものとして捉えられようとする「人間」は、「新劇」型リアリズムや「静かな演劇」型のリアルとはおよそ対極の身体意識によって「喜劇」として、明確に見せ物として演じられる。だから、台詞や笑い(苦笑)や居心地の悪い雰囲気から作られ、壊され、空間が動いていく時、勝手放題な「人間」達を制御するのは、見世物＝「喜劇」の中核を成す「間」＝タイミングに他ならない。岩松了作・演出『アイスクリームマン』においては、物語上の関係はおろか、舞台上の身体同士の関係よりも何よりも、それらが複数の要素が1つの場で交錯する「間」＝タイミングとその焦点化こそ(だけ)が命なのだ。

ただし、岩松了が俳優(の身体)を通じて現出されていく「間」＝タイミングとはTVを介してお茶の間に流通したものとはいささか趣を異にする。それは、自分の置かれた状況を痛くほど自覚し、そうした外部と自身のパーソナリティを関数として、個人的な歪みを経て言動を表出させていくタイプの登場人物達が、「喜劇」を構成するための「間」＝タイミングをみせる『アイスクリームマン』とは、観客を魅了した舞台上での「間」＝タイミングを支点として創られた「喜劇」であり、そこには「劇」としてト्रेसされた「人間」が描き出されているのであった。

松本和也/日本近代文学・演劇

INTOWN

場所とは何か?

●8月某日、瀬戸内海に浮かぶ犬島で行われたイベント「犬島時間」へ行く。3年前、「維新派」が行った演劇の舞台だったこの島は、一応、岡山市というくくりだが、船に乗らないとたどりつかない、本島の島。「犬島時間」は、島に点在するスペースを展示場所として、展覧会を行っている。メイン会場の「岡山市立犬島自然の家」にある福井一尊らの立体、絵画作品が置いてある。目の前に見える海とは逆に、島の中にある集落をたどる。旧



城の人との交流だけでなく、その場所できなければ作れない・見ることのできない作品を置くべきである。展覧会とはなにか、場所とはなにか、ということ改めて考えることができた。(藤田千彩)

「犬島時間」2005年7月30日~8月7日

郵便局や民家には、鳥を意識した青地大輔の写真や中野由紀子のガラスといった作品が並べられている。「サイトスペシフィック」という言葉があるが、「犬島時間」では、別に犬島まで行かなくても、という感じが拭えなかった。こうした「場所」に特化した展覧会では、地

告知

「クレージー・ホース ラコタの月」

北米大陸の先住民族であるコマンチやシャイアンが、合衆国政府と死闘を繰り広げた19世紀半ば、ラコタ(通称オグララ・スー族)には「狂える馬」すなわちクレージー・ホースがいた。今宵、ラコタ族の呪法により伝説の英雄が蘇り、生きる道を見失った現代の先住民女性を、ラコタの宇宙へ導く。ラコタの神秘的な伝統的歌舞と日本の能が出会いながら、大自然との共生を静かに感動的に歌いあげる。先住民ラコタの呪術的ダンスが心を深く揺さぶる。

●両国 シアターX (kai)
9月9日(金)~11日(日)
料金: 4,000円(前売り)
問 タイニイリス
Tel & Fax: 03-3354-7307
tokyo@tinyalice.net



Alice Festival 2005 (8月11日～2006年2月19日) 開催中。9月のプログラムから。

**ダメ恋愛から抜け出せない
ダメ女たちの心をえぐる、
大衆演劇風超ド派手若手集団だ。**

仏団観音びらき(大阪)「女殺駄目男地獄」
◎9/12(月)～14(水)

昨年に続いて二度目のアリス登場のこの劇団だが、今回は誘われてアリスフェスに初登場となる。

「自虐的ナンセンスコメディを追求する」というように元気印の女優さんたちを中心に、ほとんど素舞台の板の上を自由自在に駆け巡る彼女たちの衣装もメイクも派手派手コテコテ。それもそのはず大阪からの若い劇団なのだ。日舞あり大芝居ありお笑いありの身体を使った舞台は、いま流行りの大衆演劇風味を持った数少ない劇団のひとつで、今回はどんな新ワザを見せてくれるか大いに期待したい。その新作は、人気漫画家の倉田真由美の代表作「だめんずうおーかー」で、その存在を知られた「だめんず」(ヒモ、暴力男、浮気男などに代表されるダメ男のこと)にはまる女たちの心理に切り込み、ダメ恋愛から抜け出せないダメ女たちの心の傷をえぐりだしていく。これ

から、日本全国に仏団菌をばら撒いていくと、張り切っている彼女たちに注目だ。



**朝鮮高校女子バレー部での事件を
題材に、在日の見えざる「分断線」を
照射する実力派。**

劇団アランサムセ(東京)「アベ博士の心電図」
◎9/16(金)～19(月)

この数年、すっかりアリスフェスの常連となっているアランサムセは、在日朝鮮人だけで構成する劇団としてもその人気を定着させている。在日の同胞たち共通の痛みや悩みを題材に座付き作家の朴成徳が書き下ろす台本は、在日に限らず我々日本人の胸に強烈に響く優しさ切なさに溢れている。ともすれば暗くなりがちな題材を扱うが、そこを演出家で役者でもある金正浩が、笑いあり涙ありのエンタテインメントな舞台上に仕立て上げる今回の新作は、1990年に大阪の朝鮮高校女子バレー部が、府大会に参加を認められながら、予選途中で大阪府の高校体育連盟が、学校側に辞退を強制したという実際の事件を元に、在日の見えざる「分断線」を描き出す。物語は、人工心臓を作り出し、生命工学の第一人者となったアベ博士が主人公。彼が人間の本質的な支配を目指し



取り組み始めたのが「人工心臓」の研究。記憶を失った青年の過去を新たに書き換えるべく、博士はある計画

アジア各都市をネットワークで繋ぐ新宿の小劇場 TINY ALICE より最新ニュース

を進行させていくが…。結成17年目を迎えたアランサムセの底力に期待したい。

**奏でる音楽が言葉となり
パフォーマーの動きが物語る。
サブカル+シェイクスピアで刺激炸裂!**

Afro13 「Death of a Samurai」
◎9/22(木)～25(日)

言葉ではなく、五感を刺激する作品を作り続けた<演出家・佐々木智広>の集大成、世界観的には世界でも高い評価をされる日本のマンガ・アニメといったサブカルチャーと、イギリスが生んだ偉大な作家<シェイクスピア>作品との融合。昨年はイギリスにて16日間のロングラン、日本でのイベント、演劇祭などから最高評価の5つ星を受け、なぜかイギリスで、日本よりも高い評価をいただく。海外において、日本語上演でも評価された作品とはどんなものなのか? 観ている人の五感を刺激し、奏でる音楽が言葉となり、パフォーマーの動きが物語る、Afro13の世界観。

「これは演劇ではないですよね…」と言われたAfro13の自信作! 「Death of a Samurai」ぜひあなたの五感で体感してみてください。



アジアの記憶がお互いの声や身体を通して響き合う。 13地域からの表現者を迎えて、 第5回Asia meets Asia 2005、待望の開催へ。

第5回 Asia meets Asia 2005
期間: 2005年10月17日～23日
会場: 麻布die pratze (公演) /
プロトシアター(シンポジウム・ワークショップ)

<参加劇団>★Exile Theatre (Afghanistan)
+Bond Street Theatre (USA) ★Bishkek
City Drama Theatre (Kyrgyzstan)
★Sovanna Phum Company (Cambodia)
+Integrated Performing Arts Guild
(Mindanao)+Waterfield Theatre (Taiwan)
★"Unbearable Dream3" Asia meets
Asia Collaboration Project No.4アジア8地
域からのコラボレーション
☆クアトロガトス(Tokyo)☆イマージュオペラ
(Tokyo) ☆チームタバス(Tokyo)
問=Asia meets Asia 実行委員会
tel: 03-3360-6463
mail: ama1997@nifty.com

Asia meets Asia 実行委員会代表/大橋宏氏に
インタビュー

●はじめにAsia meets Asiaについて教えてください。
大橋—具体的には、僕らが知らないアジアの現代演劇を3つ4つ日本に迎え、そして一定期間共に滞在しながら、お客さんと一緒になって、お互いの公演を見合い、シンポジウムやワークショップをして、いわば演劇キャンプのような時間を過ごす。よく国際フェスティバルで文化交流って言うけど、でも実際は海外から来る劇団は、それぞれ別にやって来て、自分の公演したら

帰っちゃう。直に言葉を交し合うような実質的な交流機会は、劇団相互にも、お客さんとの間にもほとんどない。興行的な作品中心主義とでもいうのかな。でもそこからは、将来関係を築くような理解や信頼は生まれない。

●共に滞在するとすると、実際は大変そうですね?
大橋—大体1週間くらい。その間にリハーサルもし、公演も1日3連続公演の日を作って、お互いに見えるようにする。お客さんも体力勝負だけど、これが以外と飽きない。互いに同じような顔つきしてるんだけど、言葉が違う、雰囲気や身体性、音の響きが違う、でもどれも、アジアってことでどこか親しみがある気がする。

●アジアの共通性ってあるのですかね?
大橋—その昔西欧から見て、日の出る地方がアジアって呼ばれて、世界で一番大きな大陸と周辺の島国っていうことで地理的に地続きだけど、そこにさまざまな民族、宗教、文化、言語が混在している。共通性より、ディスカバリーアジア、旅行会社の宣伝じゃないけど、アジアの多様性がいい。グローバル化って言われる今、アジアのローカルなもの、その現れの中には、それぞれとても強いものがある。その強さがどこから来るのか? 自然とか宇宙とかとの結びつきがまだ残っていて、だから豊かに感じられてくるのかな。批評家



新しい演劇を発信する神楽坂と麻布の小劇場 DIE PRATZE より最新ニュース

が演劇やダンスを論じる時、多くは西欧的な視点や言説が中心になっているけど、アジアに見られる価値をどう評価し取り入れていくか、これからの課題だ。

●今回のAsia meets Asia 2005について?
大橋—おかげさまで1997年に第1回を開始し、ちょうどそれが香港返還年だったんだけど、東南アジアから南西アジア方面まで足を伸ばしながら未知のアジアを探しながら、今回で第5回を迎える。この間「9.11同時多発テロ」を経て、昨年はイスラム文化圏のイランやバングラデシュ、在欧イラク人の演劇を呼んだ。今回は、遠く離れて点在するアジア13地域から多様な表現者たち計40人余を迎える。身近にあって見えないアジア、忘却されつつあるアジアの記憶がお互いの声や身体を通して響き合う、それがどんが痛みや懐かしさ、希望を伴うのか、楽しみです。

JOIN IN THE PICNIC 期待の公演情報

◆神楽坂die pratze
9/30(金)～10/2(日) 劇団X-tension
STAGE:3「さて、ここでクイズです」
問=070-6464-6661

◎父の遺産を手に入れるため、実の弟を殺害する決心をした姉。しかしそんな姉の思惑とは裏腹に、予期せぬ殺人が! 次々と繰り出される迷推理、犯人は一体誰だ?!



◆麻布die pratze
9/23(金・祝)～9/25(日)
恩田ツアー-2005「雨の日の
金星人」『まだら夜日本昔ばなし』
問=090-6473-5568 (制作)

◎恋する少女は問いかける。朝が夜を刈り取っていく仕組みを。太陽の家出先を。恩田ツアー第1弾は東京タワーの懐で語られる、真昼と深夜の昔ばなし。



